日本経済新聞

8月22日

水曜日

発行所 日本経済新聞社
東京本社 ☎(03)3270-0251
〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
大阪本社 ☎(06)7639-7111
名古屋支社 ☎(052)243-3311
西部支社 ☎(092)473-3300
札幌支社 ☎(011)281-3211

高松・栗林公園で結婚式を語る

ひと・まち・産業

地元の風習 観光資源に

フェアリー・テイル社長
藤田 徳子さん

ふじた・のりこ 1972年岡山県倉敷市生まれ。神戸女学院大を卒業後、広告代理店に勤務。結婚を機に高松市に移り、98年にブライダルプロデュースのフェアリー・テイルを起業。持ち前の行動力と発想で、数々の斬新な結婚式やイベントを企画している。

■ブライダルプロデュースのフェアリー・テイル（高松市）を経営する藤田徳子さんは、文化財の栗林公園を結婚式に使うという斬新な発想で高松の観光資源の使い方に新風を吹き込んだ。地元ではなく、都会の若者にPRするというのも、観光立県の流れを先取りしたものだった。

「栗林公園は松平の殿様の別邸でお庭の国宝。管理する県に乗り込んで話をしても、はじめは、何をいいよんかいなという感じでした。でも、何か方針の変化があったのでしょう。ある日、一度話を聞かせてという話になりました」

「都会に住んでいるが、結婚式くらいは地元でという若者に売ろうと思うという話をしました。栗林公園なら都会のセンスにも応えられる。結婚式というのは飲食も伴う、宿泊も伴う、物販も動く。結婚式というのも観光資源のひとつの使い方だと思いますと」

「では、一回やってみましょうとなり、実現したのが2012年。運にも恵まれ、リクルートの良い結婚式グランプリの2位に選ばれて話題になった。何が起こっているのかと高松市長に呼ばれ、市が『結婚証明書』を発行するなど、行政の支援もついてきました」

■結婚式の場所として、栗林公園のブランディングに成功したわけだが、都会の感覚に迎合するのではなく、中身は地元流というのが藤田さんのやり方だ。

「例えば花嫁菓子を配る。そういう婚礼風習があるんです。はじめ若い人たちは古めかしいと嫌がるのですが、再興してあげる。これがかっこいいんだよと。鯛そうめんを振りながら練り歩く『とり魚』とかね。上っ面のかっこよさではなく、地元の伝統の良さを掘り起こしてあげると、やっぱり満足してもらえる」

「引き出物にしても、カタログギフトもいいけれど、地元の味をそれにふさわしいパッケージに仕立てたら、遠くから来ていただいた方々にも喜んでいただけると思って、重箱仕立てのものを作りました。地元の人は地元の良さになかなか気がつかないもの。栗林公園だってある年齢以上の人は『遠足で行きました』みたいな感じですよ」

■岡山県倉敷市の出身。ビジネスを通じてこの22年間、高松の変化を肌で感じてきた。よそ者に対して、開かれた都市に変わってきているという。

「10年以上前でしょうか。当時、香川県観光協会の会長をやっていた梅原利之さん（現JR四国顧問）が『香川県が生きていくためにはよそ者と若者とばか者に力を借りるしかないんだぞ』とおっしゃった。これを聞いて、その通りだと思った覚えがありますが、だんだん、そうなってきていると思います」

「よそから来た人が香川の魅力に気づいてくれて、若者の新しいアイデアで、前例を覆すようなばかげた発想で、と。結婚式などイベントプロデュースの仕事で対価を平気で請求できるようになったのも変わった証拠です。我田引水のようですが、ソフトのプロをもっと育てていったらいい。いいモノはたくさんあるのですから、それを生かすソフトがここにはもっと必要だと思います」

栗林公園内にある1899年完成の商工奨励館（高松市）

二言メモ 憩いの場、潜在能力発掘

ＪＲ高松駅から南へ2キロほど行ったところにある栗林公園は、今は日本の有名庭園にも引けを取らない景勝の地として観光客を呼び寄せているが、昔は動物園やプールがあって、その性格は市民の憩いの場のようなものだったという。

園内にある商工奨励館も、専ら県の工芸品展示施設として使われており、披露宴などのイベントスペースに活用されるようになったのはリニューアルオープンした2015年のことだ。

そんなところに結婚式はもとより、高級車の新車発表会や各国大使の食事会などを開ける場所としてのポテンシャルがあることは、地元の人だけで議論してい

てはなかなか気がつけなかったのではないか。

広く知恵や発想を募る柔軟な行政の重要性を、昭和から平成にかけての栗林公園の歴史は示している。

（高松支局長　深田武志）